

## 知見の囀り裏端

## 駅と絵画とイノベーション



技術経営士の会 山浦 雄一



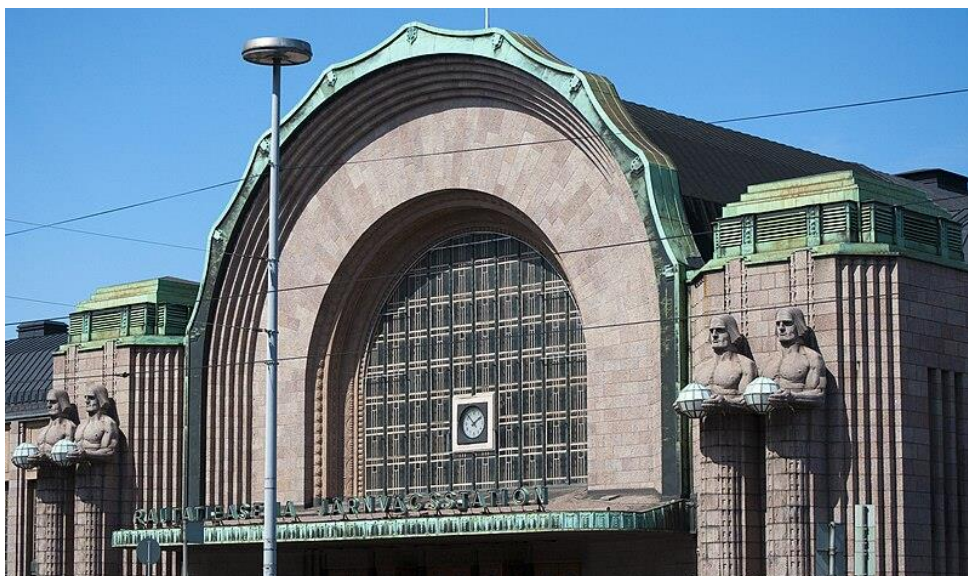
### [鉄道好きの駅マニア]

鉄道好きである。

小学生の頃、故郷信州から蒸気機関車で越えた碓氷峠。26のトンネルと途中駅・熊野平で買う「峠の力餅」は、終着上野駅行きを期待させる嬉しい舞台場面だった。

やがて大学院1年目の夏、今しかないリュックを背負い一人シベリア横断鉄道に乗った。1976年、社会主義ソビエト連邦の時代である。1960年代に作家の小田実や五木寛之が描いたような若者の一人旅。横浜港を発ちナホトカ航路とシベリア鉄道を使い、モスクワを経てレニングラード（当時名）から北欧に抜ける、あのルート、あの旅スタイルである。ソ連でのネタは多くて書き切れない。

フィンランドへの国境越えはソ連製のごつい夜行列車。国境間近、白夜でも暗い時間帯、銃を持つソ連兵が車両に乗り込み、一人ずつ厳重な荷物検査をした。何時間かの徐行運転の後、列車はヘルシンキ中央駅に到着。横浜出港から16日後の午前、快晴の駅広場で、1919年建造の斬新な北欧風駅舎を見ながら味わった解放感。格別であった。駅は、旅人に土地の顔を見せる。終着駅や無人駅に漂う独特の空気感もいい。



「ヘルシンキ中央駅正面 ©CGP Grey, 2009」

## [オルセー美術館：旧オルセー駅]

海外出張の空き時間で狙う行き先は美術館。重点的に見るべき作品を絞っておけば、1時間でも十分楽しめる。パリ。セーヌ川のほとりチュイルリー庭園近くに、ルーブル美術館、オランジュリー美術館がある。後者はクロード・モネの「睡蓮」づくし。圧巻だ。だが私の足は、コンコルド橋を渡り対岸のオルセー美術館に向く。元々はフランス人建築家ヴィクトール・ラルーが設計したオルセー駅舎兼ホテル。1900年のパリ万博開催に合わせて建てられたというが、当時の建築デザインと現代の洒落た駅再生・活用に感嘆する。

オルセー美術館には印象派の絵画が多い。その中に、モネの作品群「サン・ラザール駅」がある。1837年開業のパリ最古の駅。12点が描かれ、11点（駅舎4、駅周辺7）がオルセー所蔵。残り1点（駅周辺）は箱根のポーラ美術館所蔵で、なんだか嬉しい。

オルセーでナビ派の絵画を見るのも楽しい。ナビ派は、先行した印象派とは異なる色彩への解釈を持って、1880年代パリで誕生した。ナビ派の一人フェリックス・ヴァロットの絵からは、何やら意味ありな大人のストーリーが伝わる。ヴァロットのコレクションは、東京駅近く、三菱一号館美術館も凄い。元々は、「日本の近代建築の父」英国人ジョサイア・コンドルが設計し、1894年に完成した三菱一号館。

1968年に解体された一号館が、2010年、同じ地に美術館として復元された。建物と同時代の、アンリ・ド・トゥールーズ＝ロートレックなど著名画家の秀作が多数収蔵されている。



「オルセー美術館 ©Dinkum, 2012」



## [スタートアップ施設、スタシオン F : 旧貨物駅舎フレシネ]

2005年、フランスは産業再建策を本格化させた。国の経済活性化と競争力向上、成長・雇用促進のため、今では国内70以上の地域を指定し産業強化を図っている。日本同様、重要課題はイノベーション創出、R & D成果の事業化、中小企業の成長支援である。

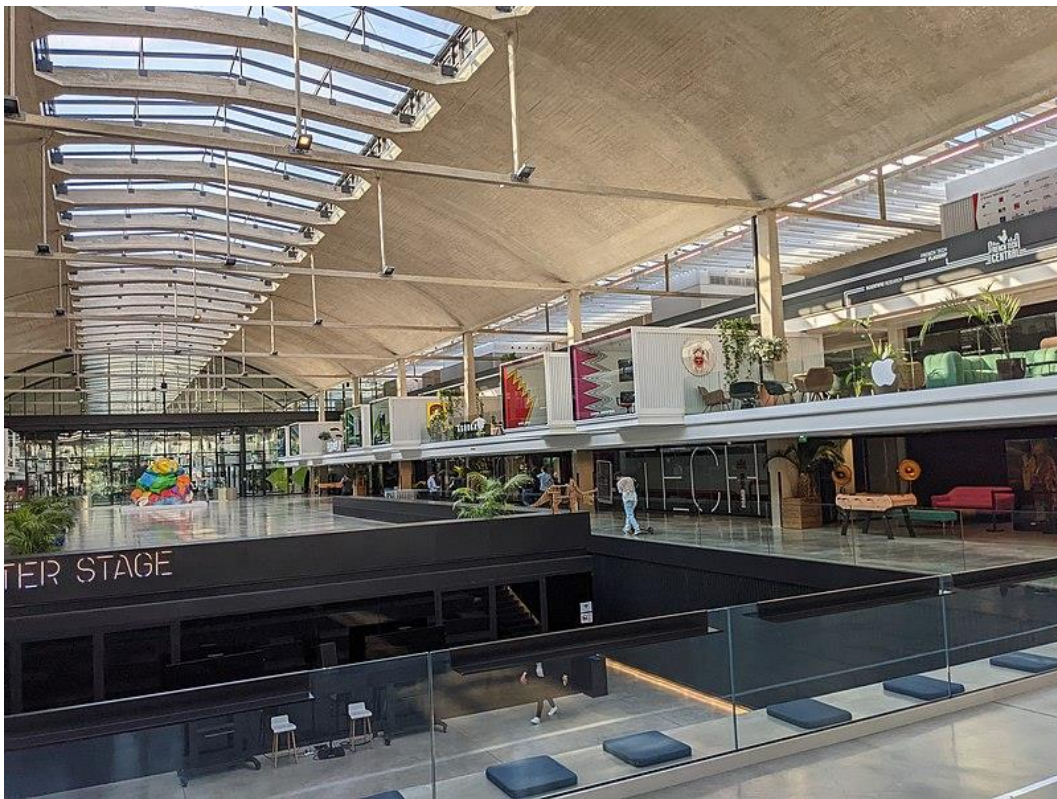
その中で、2017年6月、パリにスタシオン F（ステーション F）と呼ばれる、敷地面積3万4千平米、世界最大級のスタートアップ施設が開設された。フランス人実業家が、廃止された大貨物駅舎フレシネを、2億5千万ユーロ（約390億円）の私財を投じて改装したのである。政府資金は全く無し。イノベーションを生むのに税金投入は駄目だ、という実業家魂を感じる。

駅舎フレシネは1929年に完成した貨物宅配用の大ホールで、当時「技術的にも建築的にも秀でた品質」と称賛された。設計・建設を統括したのがフランス人ウジェヌ・フレシネ。

コンクリート強化技術を考案し、多くの橋梁・建造物の建設と補強・救済で世界に功績を残した土木・構造技師である。旧駅舎名「フレシネ」も、新施設名「F」も、彼に由来する。

2018年秋、私はスタシオン Fを訪れた。スタートアップと彼らへの支援企業・協働企業が同居し、工房、集会所、イベントスペース、カフェテリア、バー、店舗などを備え、毎日24時間フル稼働する、巨大な自由作業空間であった。経験不足のスタートアップ向けには、最大1年無料で入居出来る仕組みがある。移民・難民をも受け入れているという。

2017年の開所式でエマニュエル・マクロン大統領が大演説を打って知名度を高めた。フランスでもイノベーション創出には旗振りが必要なのだろう。



「スタシオン F（ステーション F）内部 ©Artvill, 2022」

## [結び]

優れた建築家の古い建造物は芸術作品で文化的遺産。再生・活用は、保存策でもある。

2024年パリ五輪の開会式会場はセーヌ川と両岸。立ち並ぶ芸術的遺産が様々な保存策で輝き、文化のソフトパワーを醸し出す。そんな無言のメッセージの演出があるにちがいない。